

のたきゝをとり恭敬礼拝のまことをい
たしさいしやせうめつのはかり事を

そいそきける僧都のいひけるはまこと
に願求ほたいの御心にて此峰へ入行

ぬる事こそ我かため人のためうれ

しくは侍れ尤役行者のよろこひ給

所也たかひにさきたゝはかならすさい」（60ウ）

しにいんしうの益をあたへ給へよとてかき

の衣もしほりけり尺迦如来の阿私

仙人につかへてこのみをとりに後魏の

神光かひちをきりて達磨大師に

なけしかことく心さしまことなりけれ

は僧都もかくのことく秘所をゆるし

てみせけるにやをのゝ涙にむせひつゝ

かれゝになる暁ぬえと云鳥心ほそくき

こえければ

さらぬたに世のはかなきを思ふ身に」（61オ）

ぬえなきわたるあけほのゝ空

をのゝきぬゝにわかれぬればたゝひと

りもとのすみそめになりて都のかたへ

おもむきにけり」（61ウ）

（印記）

吾国の人にあひて其ありさまをいひと

とめて日蔵伝とて世にひろめ給ける

も此所にてすきぬる百廿の宿々も数

ならずおほえて平等院の僧正の千日

こもりの時草の庵を何露けしと」(58才)

思けんもらぬ岩室も袖はぬれけりと

よみ給けんもいま見る心地してすゝか

けの袖もくちぬへくおほえてかくなん

よめる

露もらぬ岩屋も袖はぬれけりと

きかすはいかにあやしからまし

此岩室にて往生をもとけまほしく又

何となくともしはらくもなんとおもへ

とも先達のゆるしなかりければ心な

らす出つらなりて行ほとに大和国も」(58ウ)

ちかくなりて人里もわつかに見えわたり

ふるき畑のほとりに鳩の声もおりし

りかほにをとつれてかつらき山の方もみわた

す時まとはせ紅葉のありければあはれ

いかにと人に尋れはまさ木のかつらとて

いつもわかぬもみち也といひければ

かつらきや紅葉の色は秋にして

よその梢はみとりなりけり

ふるはたのそはのたつきにいるはとの

ともよふ声のすきゆふくれ」(59才)

ゆふされやひはらか峰をこえ行は

すこくきこゆる山さとのこゑ

里に出ぬれはつれたりつる同行とも

我もくくとわかれ行こそあはれに涙も

とまらずおほえけれさてもわか身は

いつちへさため行へしとも思はねはいま

さら心ほそくおほえてすそろに世中も

うらめしくそありける此中にことに

あさからす契し同行なこりをおしみ

て一つ木陰にやとをとり一河のなかれをく」(59ウ)

むも皆此世ならぬ事とかやいかにいはんや

此ほとはるかに申承ぬる御心さしわ

すれかたくこそいまより後いつを待へ

しともおほえねは此世にて見参に

入らん事もたゝいまはかり也いつく

にても此世になき物と成ぬときこしめ

さるゝ事あらは後生ほたいをもいのり

てたへとやうく／＼にうちくときなきけれ

はたれもさこそ思ひ侍れともとて袖

をしほりつゝかくそよみける」(60才)

さりともと又あふ事をちきるかな

しての山路をこえぬかきりは

一百日の間ふかき谷の水をむすひ高峰

ちくさのたけは心すみけり

ありのとわたりとてをさゝしけりて霞

立こめてよろつ心ほそくおほえてあさ」（55ウ）

たちして道もわきまへぬ程なれば

さゝふかみ霧立峰をあさたちて

なひきわつらふありのとわたり

行者帰りと云所をとをりけるに僧都

のかたりけるは古児を具して此峰をとを

る人ありけるに児はとをりえすして

死にけり行者帰り侍き是よりして

此所をは行者帰りと申也されは此峰

の第一の大事の所には行者帰りとて此所

を申也ゆへに春山臥は屏風かたけを」（56オ）

事ゆへなうとをらん事をいのり申事也

此峰にさかしき所おほくありといへとも

是にすぐれたる所なしとかたりければ

かくそよみける

ひやうふにや心をたてゝおもふらん

きやうしやは帰りちこはとまりぬ

三重の滝と云所にて前鬼と云二人の

鬼のしるへにてさまゝの所おかみけり

矜迦羅制多迦の利生方便の御まな

しりをおかみ奉り大聖不動明王の降」（56ウ）

伏の御かたちを拝みても二世所求の御ちか

ひたのもしく難行苦行ともをかさねて

無始のさいしやうもきえぬらんとこゝろ

のうちもすゝしくてさかしき峰より

霧立こめてなかれおつるかの天台山の

高巖布をさらせる泉もいかてか是に

まさるへきと心ほそく深山の岩屋のほ

とりに坐禅入定の心さしかふくそ見

涙もとゝまらさりければ

身につもること葉のつみもあらはれて」（57オ）

こゝろすみけるみかさねのたき

なにとなく日数つもりて七つ池にをさゝ

かきわけ智者の宿と云所をもすきし

かは笙の岩屋にもいたりぬ日藏上人

と云人の延喜十六年の春の霜にた

なひかれ椿山寺に入て廿六年ををくり

しに承平七年の夏のはしめに此岩

室によちのほりて安居苦行して法花

真言をおこなひたまひけるに八月一日

おもはずにいきたえて夢の中のことく」（57ウ）

して蔵王にあひ奉り彼御をしへにより

て数の地獄を見めぐり延喜の聖主をほ

のほの中にて見奉り菅承相の大政

威徳天神とて第三の冥官にておは

しませしを見奉り二度帰りて

九十八年をすきて淳名倉太珠敷天皇」(53オ)

御宇己亥年駿河国住人金地上人と云

人監達の跡を追此峰をとをりき其後

九十余年をへて飛鳥清見原御時行者

此峰をとをり給ふ其後葛城明神役の

行者の命をうはふへしとたくせんあ

りしかは勅使大島下て行者をめ

し出し奉りて剣をぬき命をうは

はんとしければ行者強心なくして

つはものゝまへにひさまつきくひをのへて

宣給はく我命をおしむにあらす」(53ウ)

心さす事ありなんちかもてる剣をしはら

く我にあたへよとありしかは剣を

前になけをく行者是をとりて左右の

まゆと面とを三度なて給かくて

舌をもちてこれをねふり給てすな

はち兵にあたへ給勅使是をとりてみれ

は一の文をかけりき紙にうつして

見ければ富士浅間大菩薩の表の文也

きおそるゝ心あさからすして剣をおさ

め表文を相具して天奏を都へ出し」(54オ)

奉るいそきおとろきおほしめし儒者を

めして表の文をとかしむ其詞に云

天皇つゝしみあかむへし是凡夫に

あらず尤賢聖也はやく殺罪をまぬ

かしてすみやかに都にむかへて尊重し

住修せしむへき物也と侍りき是に

より行者罪をまぬかれて帰り行き

うらみを葛木の明神に含呪力をもちて

明神をしはり奉り谷底にしつめ

て其後行者大唐へわたりたまひき」(54ウ)

道昭僧都と云人の入唐の時は三年二一

度我か大峰葛城へかよふなりとそ御物

かたりありける其後比古持経者嘉元々

高持経者珍尊伊与持経者芳元出羽農

黒持経者興珍曳山の助音供奉日太

聖杉本の長円なんと申ておほくの先

達あひつゝき入給きこまか成事ともは

縁起面にありしかはおほえさせ給ふらん

吾朝にめつらしき事共は此峰に

すくれて侍る也とそ語ける是を聞に」(55オ)

つけても役の行者の古の御事とも思ひ

しられてことに頭をかたふけ貴くそ

おほえけるかくて干草のたけと云と

まりにつきてありけるに木のしけき

峰にてしな／＼の木色／＼に見えてあ

はれにおほえければ

わきて行色のみならず木末さへ

給へり行者此峰をとをりたまひけるに
 にきり給へる劍と杵ととらんとし給
 けるにかたくにきりて山をうこかせとも
 はなち給はす行者本尊にいのり申給て
 うちまとろませ給けるほとに夢のう
 ちにしめして宣給はく是はなんちか
 七生まてむまれかはりて此峰をとを
 りし第三の生の死骸也をのれ実をし
 らんと思は、千手陀羅尼五反般若心経」（51才）
 三巻よみ奉りてとをるへしとしめされ
 き行者うちおとろきて彼陀羅尼と
 経とをよみたまひしかはすなはち二の
 御手をひらきて劍と杵を行者にあた
 へ給き又同文三云威王の御すかたは三尺金剛
 山の御すかたは五尺なり皆ことくく石に
 て是をつくれりすへて此砌に世のつね
 ならぬ事ともおほく侍りき僧都の
 かさねてかたりけるは凡此峰のはしめ
 の先達は役の行者大和国葛上郡茅」（51ウ）
 原郷人也姓は賀茂の氏藤の衣をき
 て杉の葉を食花のしるを吸命をたすけ
 大和国葛城郡にて卅余年間孔雀
 明王呪をよみ奉り難行苦行年を
 かさね運験大自在を得給へり彼行者

の建立の所は今の当麻寺是也当山の
 修行を経て後には金剛山とかつらき
 との間に石のはしらをわたされけるに国々
 の神等^等をめしあつめわたしはしめら
 れけるにかつらきの一言主の明神かた」（52才）
 ち見にくき事をはち給ひ夜るわたさん
 とありけるを昼すら猶物うしいかて
 夜はわたさんすみやかに昼わたすへきと
 せめ給ふ御言の法に云優婆塞城に
 みたれをおこして王位をかたふけ奉
 らんとす我かたしけなくも国をまほ
 るゆへにしめしをく処也つゝしむ
 心なくして我をうらむへからすとあり
 ければ逆鱗ことに心よからすし
 て追討のちよくしを下して行者」（52ウ）
 をいましめ奉り白鳳十七年二月十日
 東海道伊豆国大島へなかし奉る行者か
 しこにして昼は王位をおそれて島に
 たゝすみ夜は駿河国ふしの峰をふみ
 とをり給き此峰は清寧天皇三年壬
 戌年飛驒国住人監達と云人とをりき
 此人は伊豆国走湯山に住して権現を
 あかめ奉り此峰を修行して其後中
 たえてむなしくとをる人なして^{（イ）}

けと云所あり此たけに劍ありき方
八角長九尺也此劍は大唐海岸寺と

云所にたからとしておさめ給ふ惣して
かくのことくの事ともこのちかきほと

におほくありきまことに縁起をひら

き見しにこそ権現井に大峰のふし

きともしられて身の毛もよたちて心」(48ウ)

すこく貴くて涙もとゝまらさりけりお

りしも月もすみおもしろかりければ

ふかき山にすみける月をみさりせば

おもひてもなき我身ならまし

をはすてと云所をみければ思ひなしに

や月ことにあかくしてしなのならねと

名にしおひてか程も月のさやけかるらん

事よとおもひて

をはすてはしなのならねといづくにも

月すむ峰の名にそありける」(49オ)

宝塔のたけと云所にて行者の母のお

はしましける所を見ければ大方此山は

すかた鉦鈴にていきほひよのつねならす

其岩室のまへに札の石とて方八尺五

寸の石ありき是は行者深山のたけ

より一日に三度此所へきたりて母を

おかみ給ける砌也かゝるあつまやといふ

とまりにて時雨の後の月おもしろかり
ければ

神な月時雨はるればあつまやの」(49ウ)

峰こそ月はことにすみけれむねとすみけれイ

平等院の僧正のたてられたりける卒

都婆の紅葉の下うつもれてあるを見

けるにもいとゝあはれにおほえて花より

ほかのとよみけん人そのかしと思ひ出ら

れて

あはれとて花見し峰に名をとめて

紅葉や今日はともとなりける

仙の洞と云所に付てありけるに僧都

のいはれけるはこの所にこそ行者の七宝生」(50オ)

までむまれ来りてこの峰をとをり行

けるにはしめの生より第三の生まて

骸骨をとゝめ給へる所也第四の生より

このかたはとゝめ給はず貴き事にて侍也

とてかたはらなる所へいきなひ行て見す

るにはしめの生の骨は其長七尺五寸

第二の生の骨は八尺五寸第三の生の骨は

九尺也もろくのつきふしはなれすし

て御まなこの中より樹生出たりき

左手にては独鉦と云杵をにきり右」(50ウ)

手にては智劍を守護しあふひてたもち

りけるなにとなく日数ふれは吹越黒
坂水飲垂水と云とまりくをも

すきて深山と云とまりに付てありける
に僧都のいひけるはすゝめたてまつ

りて此峰へ入奉りぬるしるしにはこの」（46才）

所に貴き所々の侍るを見せ奉るへしと

てかたはら成所へいさなひてこれこそ申

つる所なれとて見せけり所のありさま

山ことにそひえて鷲の嶺のいきほひをう

つし峰しかも嵯峨として鶏足の

よそほひをあさけりまことに見るもす

すしく身の毛もよたちてそおほえける

かしこに三重の岩屋あり上には金剛

界のまんだらををけり大きなる

壇ありき壇ことに闕伽の器鈴なんと」（46ウ）

云たくひあり皆ことくく石にてつくれ

りおなしき重のうしとらの角に縁起を

入たる箱ありき七宝をもてかさりて

岩をうかちて其そこに納たり其中に

縁起二巻あり其内一卷三行大峰の根源

并に熊野のこんけん金剛蔵王役の

行者の和光利物の本縁をかきのす

一卷三行役の行者の母のために一千

基の塔をくみて三月十一日のとらの

時に行者深山のたけを出て同十三日」（47才）

とらの時に大唐にわたりて仙人のくはん

しゆにておはしける北斗大師といふ

人を請し奉り同此熊野へ帰りて其

日のさるの時に供養のありけるに

行者ちかひて宣給はくもし我くはんを

諸天善神証明のあるへくは此塔へいらせ

給へと申されければ紫雲そらより

くたりて塔婆の中へ入にき此所

を大日のたけとなつてたり又は

仙のたけとも云也又は五智のたけ」（47ウ）

とも云其日の読師はいよの国湯の郡の

住人智延大師と云人也北斗大師のは

しめて来りつき給し所を空鉢の

たけとなつてきこれらのありさま

ならひに三百八十人の仙人集会の儀

式を此巻には書のせ同角の石のうへに

行者の御影ありき印文をかくのこことく

うつしとゝめたり其たけ九尺五寸也

又かたはらに御手水の井とて侍り

き石にて是もつくれりたけは」（48才）

八尺めぐりは五尺也其いたゝきに清水

をたゝへたり大雨かんはちに増減なし

とそかたりける又ならひにつるきのた

りをおろさせ給ひて円頓の大戒を
うけさせ給ふ御年わつかに十九也

いまた廿にたに満たせ給はねはおしかる」(43ウ)

へき御くはほうかなしかれば上卿相より

下黎庶にいたるまでおしみ奉らぬ

人なかりしかともつるに九重の玉台

を出給はるかなる紀州那智山へそ入ら

せ給ける悉捨王位の遺教こゝもとにあら

はれ国城布施の御つとめ実なりとお

ほえて藤の衣に御身をかくし野辺の

わらひを食御命をつくはかりこそに

て三蜜護摩の観行はたゆむ事なく

役行者の再誕かこそあやしみしか」(44オ)

りといへとも無常は賢愚まぬかれかたき

事なれはつるに寛弘五年二月廿八日

御年四十六にてうき世中をそむきて

浄利のうてないうつりおはしきいにし

へもためしすくなく後の世にもあり

かたくそきこえ給ける昔の御ありさまを

思ふにも我身のたくひとあはれにお

ほえてかれたる桜の年ふりたるか枝

の一ふさ残りてさきたりけるにも生

死無常のならひかなしくうき身にたく」(44ウ)

ひておほえければ

わきてみん老木は花もあはれなり

いまいく程かはるにあふへき

しはらくこの砌にて心しつかにすむ

事にて侍りけるはもし心あらむ先

達なんともあるならは大峰をも一見

修行してすこしき縁をもむすはん

と思けるに僧南房僧都と云人廿八度

の先達にて侍けるかすみける庵へ来

て申けるは我此峰へ入しよりこのか」(45オ)

たまことしく後世ほたいのためとて峰

の修行する人もなしされは秘する所

所のおほくあるをもゆるしてみする事

もなしねかはくはこのたひ我にとも

なひていらせ給へ貴き所の様々に

あることもみせたてまつらんとかたり

ければのそむところ是也とよるこひて

旅の間に入へき物なんといとなみてあり

しすみそめをぬきかへてやまふしの

すかたになり僧都のまひきにしたか」(45ウ)

ひておもきふちおひをかたにかけ熊野の

宿へおもむきしこそまことに心すこく

おほえしか彼悉達太子の浄居天にす

すめられて檀特山へ入給けん御心の

中思ひしられてすゝかけの袖をそしほ

はりあとを紀州無漏の郡にたれ」（41オ）
 すみかを南海のはまにしめて正直の人の
 心をうけ給^あ詔曲のまよひをうらみ
 つゝ利生をほとこし冥報をあたへ給ふ
 事のめてたさよ証誠殿は本地阿弥陀
 両所権現は観音薬師の垂跡四所の
 明神五体の王子はいつれも皆とりく
 に一子平等の慈悲にもよほされて八相成
 道の記^ま翦をきさゝむとおぼしめさるゝ
 事のかたしけなさを思ふにもすみそめ
 の袖くちはぬる心地して夜もすから」（41ウ）
 念誦つとめてそれより新宮にまいりて
 雲取紫金の峰と云嵯峨しき山をこえて
 那智の山にまいりて滝本をおかみ奉る
 に霧立わたりてすこしうちかたふきて
 なかれおつるありさま実に心すこく
 て所からにや無始のさいしやうもあらは
 れて淨利のうてないうつるらんとそ
 おほえけるされはむかしより代々の
 帝王かたしけなくも十善の玉輿を
 うこかして三業の礼拝をいたし天の」（42オ）
 したをやすからしめむとおほしめす
 もことほり也とそおほえけるさて千
 年の滝に入道するほとに常住の人

申ていはく此上に一二の滝おはします
 をおかみ給へと申ければ如意輪の滝
 とておはしますを拜奉るに実に
 観喜渴仰の涙いよく袖をぬらし
 貴くそおほえける其かたはらなる所
 に花山の法皇の御庵室の跡のあり
 ける前に年ふりたる桜のかれなん」（42ウ）
 とするを見けるにも木の本をすみかすとす
 れはをのつから花みる人に成ぬへきかな
 とよませ給けるもこゝならんとおほえ
 てむかしの面かけ思ひ出つゝかくそよ
 みける
 木の本にすみけん人をみつるかな
 なちのたかねの花をたつねて
 花山の天皇は冷泉院の第二の王子御母は
 一条の摂政伊尹の御娘安和元年十月
 廿六日の御誕生ありけるに同二年八月」（43オ）
 十三日に御年二歳にて春宮の位につき給
 永観二年八月廿八日御年七歳にて十
 善の位に付給万機のまつりことのひま
 には慈悲内にもよほし無常外にあら
 はし悉達太子の跡を追終に寛和二年
 六月二十二日夜にはかに御位をしり
 そき同廿三日に花山寺にして御かさ

ことにわりなくおほえて

まちきつるあかみのさくらさきにけり

あらくおろすな峰の山かせ

寂蓮法し人々をすゝめて百首の歌を

よみけるにねんころによみてとあつらへ

けれともとかくいなみ申てよまさり

ければ熊野の道紀国千里の浜海人の

とまやにふしたりける夜の夢に見

けるは三位入道俊成ならひに別当」(39才)

湛快なんとよまぬ事をあなかちにみて

むかしにかはらぬ物は和歌の道也なとか

よまれさらんと云と見てうちおとろき

てよみてをくりけるにこのうたをよみ

そへてそやりける

すゑの世のこのなさけのみかはらすと

みし夢なくはあやしからまし

やみはれて心のそらにすむ月は

にしの山へやちかくなるらん

やうやく行しかと日数ふれば本宮に」(39ウ)

参ておかみ奉るに聞しにもうちすく

れてよろつ心すみ墨染の袖もしほり

かぬるはかり也光を塵にましふるは

けちえんのはしめと宣へるけにもと

たのもしくおほえて八相成道(マ)をかり

にし般若妙法の法施真言秘密の

法樂しかしなから臨終正念往生極樂のた

め也と礼拝を申てかくなん

かたちかへてたすくる神のしるしあらは

つるに仏のみちしるへせよ」(40才)

神武天皇四十八年 戊申(マ)の年鳳輿を南

海の紀州にめぐらして熊野の村に

くたり給ひけるに大熊あらはれて

すなはちかくれうせにき又神の倉の

すみにのほりて天照告をうけて夢さ

めて庫をひらく神劍現にあり彼是

ともに是権現応作のかたち和光利物

のすかた也この時に天皇山を越んと

し給けるに其山嵯峨として道なし

險岨にしてとをりかたし時に八尺の」(40ウ)

雲鳥かけりくたりて道をしめすひとへ

に是権現の冥助垂跡の加被也このゆへ

に実相物に応しいて禽獣のやからを

化し神劍威をふるひてよく／＼魔

界の敵をふせく凡その一千七百六十余

年のせいさうふりたりといへとも慈悲

猶あらたにおはします利生いかてか

うたかはんかたしけなくも実報寂光

の都を出扶桑葦原のちりにまし

桜の枝に雪ふりかゝりて花をそけなる
けしきにて心もとなふおほえければ

よしの山さくらか枝に雪ふりて

花をそけなるとしにもあるかな

花は東よりひらくる事のありければ

北のかたなればをそきそと思ひて道をかへ
て尋入とて」(36ウ)

よしの山こそしをりの道かへて

また見ぬかたの花をたつねん

時をむなしうせぬためしなれともさき
みたれたる花のしたにてなかめけるに
枝をはなれてねに帰る花ありければい
たはしさのあまりに我身の上ならんと
かなしくおほえて

なかむとて花にもいたくなれぬれば

ちるわかれこそかなしかりけれ

木々のこすゑ雪をあらそひさきみたれ」(37オ)

たるありさまもわりなくおほえていかにも

この春は此山にてなんと思ひけるに都
のかたの春のけしきも思ひやられて昔

なれしたしみし好客の事もわすれ

かたにおほえて

吉野山やかたいてしとおもふ身を

花ちりなはと人やまつらん

落たる花の山川に水にうかひてわたる
へき方もなきほとなれば

風ふけは花のしら浪岩こえて」(37ウ)

わたりわつらふ山川のみつ

名をえたる山の花なればさこそはおも

しろかりけめ苔のむしろのうへにい
はねを枕にかたふけてさすかにいける

命のたよりには谷の水をむすひみね

の木をみを寂莫無人声誦此

経典とよみていよ／＼心をすゝむる

たよりにはおちくる花をそ友とする

山里のすまはさらぬたに心をすゝむる
事なればこの山にて年月をくら」(38オ)

まほしく思ひけれども命の程もしり

かたければこれより熊野へまいらん

とて出立にけりさすかにはなれかた

やありけん

をろかなる心のひくにまかせても

さてさはいかにつるのすみかは

世中をおもひはなれてちるはなの

我身をとともいつかかもせん

さて是より山桐と云所へ出て熊野道

にをもむきてまいるに赤見の王子に」(38ウ)

と、まりていかきのほとりにさきたる花

むと心の中もいそかはしく思ひ入て待
所にむかしみなれたりし人く花見に
とてありけるかなにとなきむつことと
もをかたらひて心ならぬありさまを聞
事のありければ」(34才)

花見とてむれつゝ人のくるのみそ

あたらさくらのとかにはありける

すてに出家をとけてほたいの道に入ぬ

れはいまはつくりしところのつみをも

さんけして九品のうてなにあなうら

をむすはん事何のうたかひかあらん

やたとへは一念もなき所は皆是三途の

業也善心はすくなくあく心はおほし

つみは百重の石のことしさむけは船い

かたのことし生死の海をわたりてほ」(34ウ)

たいのきしにいたらん自理のさんけに

たらずは感応うたかひなき物をやたと

へはたき木を万里につむといへともけし

はかりの火をつくれは時のほとにやけ

うせぬ在俗の時つもりし罪は出家

の時の芥子の火をつけし時ことく

くきえにき衆罪如霜露恵日能消除

是故応至心懺悔六情根此文にまかせて

いまはひとへに山林雲遊のつとめをこそ

思ひしに此処にて年のくれぬる事の」(35才)

意ならずおほえて先年のころ思ひし

所なれば吉野山に尋入て梢の花ともな

かめつゝ心をすますたよりともなんとお

もひて草の庵りを立出けりむかしいさ

さかのあゆみにも馬車を心にまかせて

数のつはものを前後にしたかへて弓箭

のたくひには金銀をもてみかくかことし

四季のおりふしのかさりには綾羅錦繡

をもちるしかとも今はこきすみそめ

のあさの衣に紙衣にてはたへをかく」(35ウ)

しすみなれし都をよそに見てはるか

なる大和道におもむきて吉野山のおく

へ入にけりたゝひとり旅立事もさす

かに心ほそくてあはれおなし心のとも

なんともあるならはいかにうれしから

ましとおほえて彼王子猷か戴安道を

ともなひて琴詩酒のあそひにはむしろ

を一になし雪月花のなかめには袖をつら

ねすといふ事なかりけるもことほり

とおほえて」(36才)

たれか又花をたつねてよしの山

苔ふみわくるいはつとふらん

かくてよしの山に尋入てありけるに

やすらふほとにとしのくれぬる

むかし見し庭にうき木をつみをきて

みしにもあらぬとしのくれかな」(31ウ)

高きもいやしきも年のはしめをまち

えては千秋万歳のたのしみをうたひ嘉辰

令月のよろこひをなかめて松根に

よてこしをすれば十八公のさかへといひ

椿葉をおりてかうへにさしては八千歳の

春秋をいはふしかれとも生死無常のすみ

かにて後年の春を待事すくなし

思ひとけは皆是夢の中のたのしみま

ほろしの間かさかへとおほえて年立かへ

るいはひ事には西方にむかつて臨終正」(32オ)

念往生極樂とそいのりけるしつかに思へ

は我仏を念す念する故に仏我をお

ほしめすおほしめすかゆへに引接なん

そうたかはんうたかひなきかゆへに生死こ

こにたえぬたえぬるかゆへにくるしみ

跡をけつるくるしみを猶たのしみ

とす其たのしみはすなはち無為真実の

さかへなりいかてか火宅の中よろこひを

はいはひ事にはし侍るへきそれ西施かむ

ねををさへしかほはせ百のこひをな」(32ウ)

せしも目のましろく間也き飛燕か袖

をひるかへせしにあはれみ外にあらは

れて后宮に立しも只是息のをよふほ

と也き楚の成王の下和の玉を得たりし

も中有のやみをはてらささりき秦の始皇

か一面のかゝみも臨終の影をはうつさす玉

のうてなをみかけとも野辺こそつる

のすみかなれむくらの露にともなひて

其名はかりそとまれるはやく我ゑあ

くのすみかをはなれて浄土のはちすに」(33オ)

うつらん事をそ思ひける庵りのまへな

る梅の花にほひを風にたくひつゝ

かほらぬかたもなかりけるにや玉ほこの

行かふ人さへななめけるもあはれにお

ほえて

こゝろせんしつかかきねの梅のはな

よしなくすくる人なとかめそ

人とかめけりイ

影とめて人をこそまて山さとの

かきねのむめのちらぬかきりは

園なりける梅花風にさそはれて草の」(33ウ)

庵りをもきはすなつかしうかほり

ければ

ぬしいかに風わたるとていとふらん

よそにうれしき梅のにほひを

柴のあみ戸もかすかにて迎雲もいつなら

こりすやたれも又しつむへき」(29才)

世をいとふ名をたにもさはとゝめをきて

かすならぬ身のおもひてにせん

さてこの人観念の窓のうちには心を三

明の月にかけてさんけの床の上にはまゆ

を八字の霜にたるとくはんして諸行

無常とはほたい心をひらくはしめ天

上にのほるはし也是生滅法とは悪業煩

悩をすてゝ愛欲の川をわたる船なり

生滅々已とは劍林をこえのほのほの山を

さくる車也寂滅為樂とは八相成仏」(29ウ)

する証果西方淨刹にまいる道也無常

虎の声はみゝにちかけれともさとらす

雪山の鳥のなく声は栖を出てわすれ

かたふかすして雲にかくるゝ月もあり

ひらけすして風にちる花もあり年

わかくして世をはやくする人もあり

老をまたすして命をうしなふ人もあり

老少不定の境前後の無常さた

めなしと云とも老体身にきはまらさる

ほとは夢の中のゆくすゑをたのむか」(30才)

たもあり衰邁期きたりぬれば後年

の春をまつへからすと云事もけにと

おほえて涅槃経の三馬のたとへの中

には駿馬のたとへにあたりて世をす

てぬる事の身にもあまりてうれし

くそありける心地観経の中には出家は

破戒なれとも在家の持戒にはすぐれた

りと云本縁経にはたとへは人ありて

七宝の塔をたてんに高サ三十三天に

いたるとも出家の功德にはをよはずと」(30ウ)

とき給かゝるめてたき功德のあるしと成

ぬる事のうれしくてむかしの事も

しらまほしくていよゝ山ふかきすま

ゐのみ心にかゝりてあはれにおほえけれ

はかくそよみける

さひしさにたへたる人の又もあれな

庵りならへんふゆの山さと

身のうさを思ひしらてややみなまし

そむくならひのなき世なりせば

なにとなく年もすてにくれなんとす」(31才)

さても去年までは世のつねのならひなれ

は年のくれのいとなみとしてさま

さまにせし事のさすかに思出られ

てかくなん

年くれしそのいとなみはわすられて

あらぬさまなるいそきをそする

をのつからいはぬにしれる人やあると

盗の罪をつらす飲酒妄語戒をたもちて念仏さんけおこたらすつとめて
 仏道をとけんとそ思ひける此時にあたりて年比の妻にあるへき事ともさま／＼に契ともさらに返事もせさりけりかなしみの色外にあらはれて見えければかさね憲清申けるは昔阿難尊者といひし人の乞食のつるてに摩登伽女といひける」(27才)
 外道の娘に行あひてたかひに心をかよはしつゝあたりまちかくすゝみよりはたへをふれてをとりて仏のおもくいましめ給へる不淫戒をやふらんとし給けるに仏波斯匿王の本よりかへり給とて神力をもて是を見させ給文殊師利におほせて仏頂神呪をみてさせ給ければ欲心こと／＼く退散して尊者も女も仏の御まへにまいりてむかしの業をとひ奉りけれ」(27ウ)
 は一世二生に契りに五百生のしゆくえんなりとそ仏仰られけるこれらの縁を思ふにも君と我此世一ならぬちきり也これにつけてもこのたひたかひにわからたからの山に入て手をむなしく

しもろともに三途の古里に帰らむ事くちおしからすや仏の御ちかひうたかふへからす引接なんそたれ給さらんやしかれはたかひにをくれさきたつと云とも後の世にはかならず」(28才)
 ひとつはちすにのほりて無生の位をふむへしとかきくときかたらへともいと返事もせず大かたは心もとなき事にはおもへともさりとてとゝまるへき事ならねは心つよく思ひきり身つからもととりきりて持仏堂へなけ入て門の外に出にけり廿五年の間すみなれし宿なればたゝいまはかりと思にもせんかたなくそおほえける猶もえんよりけおとしたりし娘の事の」(28ウ)
 心にかゝりてらうたき涙袖に玉をそつらねける嵯峨にとしころあひしりたりける聖人の本へたつね行出家をそとけにける其朝ひしりたちあつまりてこはいかなる事そとおとろき申あひたりければ

世をすつる人はまことにすつるかはすてぬ人をそすつるとはいふ
 うけかたき人のすかたにうかひつゝ

されは心地観経の中にはよく人子のた
めにつみをつくりて三途におちくるし
みをうくといへりまことやらん大六天の
魔王の欲界六天をりやうして此中
の衆生を仏になさしとて人の身に
妻子と云ものをつけをきて心やすき
事に思はするとそ申めるかのきつなと」(24ウ)
しりなから思ひしらてやあるへき思ひとけ
は是こそ陳(マ)の前のかたき煩惱のくさり
よとおもひて此むすめをえんより下へ
なさけなくけおとしければちいさき手
を面におほひなさけなくあたりたる父
をかさねてよひけるを聞につけても
目もくれ心もきえはつる心地しけれ
ともきゝ入ぬやうにて内へ入ぬかたはらの
人までもこはいかなるありさまそなんと
さはきあひたりしかるに彼女房にてあり」(25オ)
し人はおとこにはまさりける人にて
憲清出家せんとする事をかねてより
さととりて娘のなけきかなしむをみても
おとろくけしきのなかりけるさへあはれに
おほえて

露の玉きゆれは又もをくものを
たのみもなきは我身なりけり

ふしわひぬしのゝをさゝのかり枕
はかなの露やよひはかりそ
さひしさはその色としもなけれとも」(25ウ)
霧たつそまの秋のゆふくれ

夜すてに半にふけて峰のあらし松に
ひゝきぬたの音里にきこえてむし
の声まくらにをとつれてあはれをまし
心をくたかすと云事なくおもひつゝくる
に万法は心かなす所也さらに別の法なし
人界に生を得たる事は梵天より糸
をくたして大海のそのはりのみゝを
つらぬかんかことし仏教にあへる事は
億劫にも一度あひかたくてうき木に」(26オ)
あへるかめのことしといへりいかにしても
このたび出家をとけて仏道に入すし
ては又いつれの生をか期すへきや人木
石にあらすこのめはをのつから発心す
いはれありあさの中のよもきはためさ
るになをくかつらはちひろにのほる
せんたんのはやしに入ともからは衣
かならすかうはしく功利天の園には
観(マ)喜の色をふくみれんけせかいの鳥は
妙法の文をさへつるしかれは我はやく」(26ウ)
名聞けうまんの心をすて貪欲邪見殺

うとましくおほえて君の御いましめを
おそれたてまつりて今度の出家おもひ
とまりて又阿鼻の古里に帰りなは出
離いつをか期すへきと思ひて竜顔に

ちかつきすゝみて禅客の御詞をみゝに」(22オ)

ふれ関白三公を見たてまつりて御まひ

きにかゝらん事も今日はかりなり奇

恩入無為には如来のをしへかみをそり衣を

そむるは得脱の門出也たとひいまちよく

めいをそむき奉るといふとも後の世には

かならず君をもみちひき奉るへし

こゝをもて我かまことのほうけんとせん

と思ひて禁中を立出てけるにも花の

下の好客月のまへのしつめ人につらならん

事もたゝいまはかりとおほえてなみた」(22ウ)

もとゝまらすされとも心つよく思ひきり

つくり道へそおもむきしきてもこの

二月に出家は一定とおもひきたためてかく

そよみける

そらになるこゝろは春のかすみにて

世にあらしとやおもひたつかな

心さしあさからすといへともいまた其期や

来らさりけん何となき事ともに

さまたけられて契し二月のころも

はせすきておなしき七月に又おもひ」(23オ)

きたためて侍りしによろつ風の音心をくた

き月のひかりあはれをもよほしてけれ

はかくなん

をしなへて物をおもはぬ人にさへ

こゝろをつくる秋のはつ風

世のうきにひとかたならすうかれ行

こゝろさためよ秋のよの月

物おもひてなかむるころの月の色に

いかはかりなるあはれそふらむ

秋も又のかれぬねかはくは神明三宝も」(23ウ)

さはりをのそきてこのたひの出家事ゆ

へなふとけさせ給へといのり申てやと

へ帰り行ほとにとしころたへかたく

いとおしき四になる娘えんに出むかひ甲

斐なけなるけしきして父のおはせるか

うれしきとて袖にとりつきけるを

たくひなふいとおしとは思へともすきにし

かたの出家も大かたは此娘ゆへにとゝまり

きたとひこの娘をすてかたき事に

思ひてこのたひの出家も思ひとゝまると」(24オ)

いふとも老少不定のならひなれはさため

てひとりはさきたつ事あらんに豈

心にまかせてとゝまる事ありなんや

殿は今夜ねしに、に^(マ)しなせ給て候といひけ
れはよりてとふらひみれは十九に

なる妻と七十あまりになる母枕にふし」(19ウ)

あとにたはふれてなきかなしむ是を聞に

いよ、かきくらす心地してかくあら

むとて思はずの外の世のはかなき事

ともかたりけるにやはしめておとろ

くへき事にはあらねともあへなしと

云もをろかなり風のまへのともし火

蓮の上葉にをける露いなつまかけろふ

あさかほの花夢の中のゆめとおほえ

てきも、きえ我身もわか身ともおほえ

すうとましきかたもおもくそ侍りける」(20オ)

されは朝有紅顔誇世路暮成白骨朽郊

原と云事まことにおほえて未のあ

ゆみきもまとひ少水の魚の心すみきし

のひたひのねなし草江のほとりにつなか

さる船さためなき世の中そかしと観

しこ、にてもと、りをもきらまほ

しく思へともいま一度竜顔を拝み

奉りいとまをも申さんと思ひなをし

てはやきひつめにむちをあけ鳥羽殿へ

まいりける抑此人は憲清には年二のあ」(20ウ)

に、てことしは二十七そかし老少不定の

すみかをくれさきたつためし思ひまう

けたりし事なれともけふかゝるへし

とははからさりし事もありしはなくなかり

しは数そふ世中あはれいつまであらんと

すらんよめることのはりとおほえて

こえぬれは又もこの世に帰りこぬ

しての山路そかなしかりける

世中を夢とみる、はかなくも

猶おとろかぬわかこゝろかな」(21オ)

年月をいかて我身にをくりけん

昨日の人のけふはなき世に

とうちなかめことにきしめきてまいりた

りければ人、目おとろき君もいみしく

おほしめされて昨日の御感ともおほせ

いたされたりけりおりふし管絃のと

ころにてありければ憲清をめされけり

師曠か燕雀のあそひをなし蔡邕か椽

桐をしれりしにて沓をさかさまに

せずと云たくひなかりき管絃の事」(21ウ)

をはりて後頭の弁をもて出家のいとま

を申入たりければことにおとろきおほ

しめして御ゆるされなかりけりさら

に思ひよらぬ事なりとはかりそおほせい

たされける是につけても世の中のみ

きかたも侍き其後鳥羽殿へまいりて」（17才）
ありけるにいつしかめつらしき御気色に
て詩歌の宴の侍りけるにめされ

ておほくの藻篇をつくりき是につけ
ても彼晋の陶潜か琴詩酒をこのみて

門には五本の柳をうへて春の心もなく

さめみきんには一くきの菊をつくりて

秋のともとたのめしもたゝ一期一たんの

興也後世のたくはへにあらすひと

へに万事をすてゝ後世ほたひもたつ

ねんとそはかりける日も西にかたふ」（17ウ）

き月も東に出んとするにのそみて宿へ

帰りける佐藤左衛門憲康と云もの

鳥羽殿よりうちつれてかたりけるは

われら黄石公に一帖の書をあたへられ

たるにはあらされとも民として武勇

の芸人にすくれたり彼陳平か項羽

をほろほして高祖をくらるにつけ

魏顆かりよしゆくの夢のまくらに後

秦をうちしにもおとりおほえす秀郷

の將軍東夷をしつめしよりこのかた」（18才）

かたいまにいたるまで城のかたためにて

世のみたれをしつめ今我等も宗仁天

皇の寵愛をかふりてほまれを八埏に

ほとこせりしかりといへともつら／＼

事の心を思ひとくに皆是夢のうちの

ほまれまほろしの間のよろこひなり

楊朱行客をみていつれか南いつれか

東と墨子か糸の色にさためなき世の

はかなさをなけきけんもことほりとおほ

えてあはれ事のたよりあるならば」（18ウ）

すみそめに身をなして山ふかきすまゐ

をもし猶いかにやらんこの程は世の中

のさためなき事のみおもはれてけふあり

とても明日をまつへしともおほえすと

人めあやしき程に袖をそしほりけり

憲清も是をきゝていまさらかゝる事を

かたるはいかにあらんする事やらんと

心さはきてかへりけるに憲康申ける

はあしたはたれもいそき鳥羽殿へまい

るへく候也あなかしこ／＼うちよりて」（19才）

つれ給へきよしねんころにいひて憲康

は七条大宮にとゝまりけり憲清其朝

まいりさまに憲康をさそはんとて大宮

へうちよりて見れば門の外に人おほ

く立さはきて内にはさま／＼にかなしみ

ななく声聞えきあやしやとおもひて

すゝみよりて何事そとたつぬれは

たる所をみて

道のへにしみつなかる、柳かけ本ナマに

しはしとてこそ立とまりつれ

秋のはしめ風草葉をむすひした葉の露

もをきところなく心ほそくかゝれたる

所を見て

あはれいかに草葉露の本のこほるらん

秋風たちぬみやきのゝはら

山田ニのまもる庵のほとりに鹿のなきた」(15才)

る所を見て

小山田の庵ちかく鳴鹿のねに

おとろかされておとろかすかな

たかき山に白雲のかゝりたる所をかゝれ

たりければ

秋しのや外山の里や時雨るらん

いこまのたけに雲のかゝれる

をくら山のみねのあらしにさそはれて

月さやかなるところをかゝれたりける

を見て」(15ウ)

をくら山ふもとの里ニや木の葉ちれば

梢にはる、月をみるかな

勅宣そむきかたきにて十首の歌を

よみて奏し申ければ能々御了簡

ありて近代の名歌末代の規模也時

の手書定信時信をめしてそかゝせ

られける憲清に歌の纏頭あるへき

よし仰下されて朝日丸と云御はかせ

をあかちのにしきのふくろに入て

頭の弁のきやうにてそ給はりにける」(16才)

又女院の御かたへめされて権中納言の御

つほねのうけ給りにて御はした物を

とめのまへにてかさねたるうへのくれ

なるの十五の御きぬをいたきてかつ

けられたりければ見物目をおとろかし

聞人したをうちてそあさみあへりし

我身にとりても今生のみやうもん何事

か是にしかと悦ひの涙袖にあまりて

そおほえけるしかりといへとも梁鴻か五

噫をそたて世をいとひ、秉去か三惑を」(16ウ)

なかめてましはりをよくみけん事も

思ひ出されてよしなき事にそおほ

えける其くれにやとへ帰りたりければ

妻子眷属是をみて悦のゑつほをひら

きゑみのかほはせをあらはしき是

につけても名聞利養は悪道の道しる

へ妻子僕従は生死のきつなど云事

の思ひ出されてかゝる事もかへりて御

法の道をすゝむる智識にもやとうれし

さらにしも又世のいとほしき

この人常に難波津の風をあふひて心の
中のちりをはらひ富の小河のなかれ

をくみて心をすましてたよりとし

きこれにて君もおりにしたかひ四季

につけて題を給はらせて歌なん

とめされければ時をうつさすいとな」（12ウ）

み申ければえいきんいよくあさからす

そおほしめしける中にも立春の

題を下されて侍りけるに申け

るは

いはまとちし氷もけさはとけそめて

こけのしたみつまちもとむなり

立帰る春をしれともみせかほに

としをへたつる霞なりけり

うくひすの声そ霞にもれてけり

人めともしき春の山さと」（13オ）

大治六年十月十日鳥羽殿へ御幸なら

せ給ひてはしめたる御所の御障子の絵

とも勸覧ありけるに実に優なる

御気色にて経信匡房基俊俊

頼井憲清をめされて此絵共に一つ、

を題としてをのく一首の詠をそへ

らるへきよし鳳詔出されけるにをのく

いとなみよみける中にも憲清其日の

中に初春雪つもりたる山のふもとに

谷川の流たる所をみて」（13ウ）

ふりつみしたかねのみゆきとけにけり

きよたき川の水のしらなみ

山里の柴の庵りに聖人のこもりたる

まへに梅花さきたる所かゝれたり

ければ

とめこかし梅さかりなる我宿を

うときも人はおりにこそよれ

花のさきみたれたるしたにゐて月を

なかむる男をかゝれたる所をみて

雲にまかふ花の下にてなかわれは」（14オ）

おほろに月はみゆるなりけり

夏の始にほとゝきすをたつねて山田の

杉のむら立の中にわけ入たる男をかゝ

れたりければ

きかすともこゝをせにせんほとゝきす

山田のはらのすきのむらたち

時鳥のはつ声たつぬるかひありてきゝ

得たる所を見てかくなん

ほとゝきすふかき峰より出にけり

外山のすそに声のおちくる」（14ウ）

清水なかるゝ柳陰に水むすふ女をかゝれ

人のをしへをまたすして心にたくみ
て思ひしれ我らかたちを東域にえた
れともおほく西天に聞溟渤百万里の
浪をはしのかす葱嶺五峰のけはしき
をよちねともあなから智識にあへり」(10オ)
たち所に経卷をひらき見る根機しなく
なるかゆへに教法まち／＼にわかれたり
有縁のすゝめにはいつれの生死をかたらむ
無縁の慈悲たえずは利益なにをかうた
かはん一仏世に出給ておほくの衆生を
渡して其仏ねはんし給て又仏世
に出給はん事かくのことし三世の間に
三千の仏の出給はん事のひさし
きをしかるに地獄の衆生の命にたくら
ふれはかた時にをよはすところ申」(10ウ)
たれたとへは人ありて大なる石をとり
て天へうちあくるにいくはくもなくし
てすなはち地に落かことく出かたき悪
道を出たりとも名利のためにほ
たされなはねかふ心もなきゆへに又か
へつてしつまん事のかなしきよこれら
のことほりを思とくへし有相の道心か
けぬれは無相の法理にいたらすといへ
るは古人のをしへ也無常をねといふ

ともいたすへし法源をわきまへさるは」(11オ)
先賢のいましむる所也ともつなをとかす
して船を出すにたりつるなふして
弓をひかんにことならずよく／＼はかり
てこれをしれまことに煩惱八万四千に
わかれたりといへとも根をたつぬれは
名利の二を出すこのゆへに竜樹菩薩
の給はくとめりといへともねかふ心やま
さるをはまつしき人とすまつしくと
いふとももとむる心なければとめる
人とすとのへたまへり書写上人は臂」(11ウ)
をかゝめて枕とするにたのしみ其中
にありなに／＼よりてかさらに浮雲の榮
耀をもとめんとかき給へりこれらのこ
とはりをおもふにも出家の心さしあさか
らすといへとも大かたはみやうりをんあひの
きつなきりかたくしてむなく月日を
をくりける事もあさましくおほえて
かくそよみける

いつなけきいつおもふへき事なれば
後の世しらて人のすくらん」(12オ)
いつの世になかきねふりの夢さめて
おとろく事のあらんとすらん
なに事にとまる心のありければ

かいとふ心なかるらん何事のたのしみに
 て火宅のほのほにもえなから牛の車
 に乘にあらさる何事のいはれにて」(7ウ)
 まつしき里にめぐりて衣の玉をとる
 にあらさるよく／＼我心のはちなき事
 をはつへしこまかに我身のまさな
 き事をつゝしめなんそ人間生
 をうけたる事をよろこはん豈人の後を
 きたるちくしやうにことならん哉く
 るへき人我狂事をわきまへす酔る
 もの身つから酔事をしらするか如し
 いかてか是を心ある人といはんはやく心
 なき草木にひとしかるへし夫三界」(8オ)
 六道に行めぐりし其間いつれの生を
 かうけさりし或は大梵高台のゆか
 にも侍りき或は転輪自在のくらゐに
 もそなはりき餓鬼飢饉のうれへにも
 あひ畜生残害のかなしみにもあへり
 き何事のおほつかなくてねかはさるらん
 いつしか思ひわすれていとほさるらん
 つみをつくりてまさしくくるしみ
 をうくへしとまことに是をしれども
 このみて猶はゝからす善を修しては」(8ウ)
 たのしみをうくへしとまさしく是を

思へとも物うくしていとなまず先の
 世にねかふ心のなかりしゆへにい
 まあさましき報を得たり此たひい
 まのことくしてすきなは後の世のくるし
 みたれかとかをゆつらんこゝに死かしこ
 に生るゝたくひいつれのかたより来り
 ていつちへかさる我をうめる母も我子の
 来れる所をしらす生をうくる我身
 もいつちより来れりともわきまへす」(9オ)
 是程にをろかなる心にていかてかたやす
 くも生死をはいつへきつゝかなき時世の
 たのしみにほたされてやまふを身に
 うくる時はおとろく心をくはたつはな
 はたをろかなる也病のゆかにふして
 は人ことに思ひき此病たにもなかりせ
 はほたいのたねをもうへましとしかる
 にたま／＼其病をまぬかるといへとも後
 の世をねかふ人はいまたなし詞のはし
 には御法にあへる事をよろこひかた」(9ウ)
 ると云とも心の中には名利のおもひにとち
 られて詞と心とたかへり豈たやすく
 も正覚を身にとなへむやかなしきかな
 や春の池に入て石をとりて蓮瀛に
 おもむきてむなしくかへらん事よ返々

るは死すへき門を出とめるはまつし」(5オ)
かるへきもとひ也しかるに人ことに死す
へしともおもへる人なくをとろふへし
とさとの物もなし目をとちてすきにし
かたを思へはよろこひもなけきもみなむ
かしかたりに成にきゆひをおりて
見し人をかそふれはしたしきもかく
れうときもさりにきすむ里に人のな
きにあらねともいにしへの人はすく
なくむかしの家はうせにきおほかた
これをとふらへはよもきかもとにかくれ」(5ウ)
て其名はかりをとゝめをくいらかをちり
にうつみて石すへはかりをのこせり彼
北州一千歳西五百年なんといふか
こときならばよはひさかんならんほとは
しはらくほこる心もありなんそれすら
心あらんたくひたれかたのしみ思ふへ
きいかにいはんやいまこの南閻浮提は老
少不定のところにて或ははとの杖にす
かりて身をまたくする人もありあ
るひは竹馬に乗ながら衆をうしなふ」(6オ)
たくひもあり病人はとゝまりてとふらふ
人はさきたち富りし人はおとろへてま
つしき人はさかふるもありなをさりかて

らのことのはのはしには身のあやまりを
かなしむといへともまことの心のうちには
其をかせる事をかなしますむつこと
のたよりにはよはひのたけぬる事を
なけくといへともさためにおとろふ
へしと思つる人はなしたゝかくのことく
してかたちははからさる外におとろへ」(6ウ)
年はおほえすしてつもる此中になさ
けあるもなさけなきも或はいとおしき
子にをくれ或はさりかたき夫妻に
わかれて或はすかたをかへあるひはすみ
かをすて世のはかなき事をなけきお
もふと云とも日数ふり年月もかさぬれは
ありしなけきはきゝはてゝ衣の色は
利養のためにけかされ柴のあみ戸
は名聞のためにやふれぬしつかによく
よく思ひみるに我らか心のありさまを」(7オ)
よる／＼思と思ふ事はみな是三途の業
日々になしとなす事はこと／＼く六趣
の因也たれかくるはす所なれば慚愧な
くして年ををくるらん何事のよろ
こはしくゑみをふくみて日を重ぬら
む無常まなこにさへきる豈人のすゝめ
をまつへきやくるしみ心にありいかて

は奉公をいたすといへとも内には世のはかなき事を心にかけて坂上の政佐か地こくにおつるさかへや夢にて檢非違使にならしとて五位のかふりを給てこの世ののそみをすてける事もおもひいたされて大集経の中には妻子珍宝及王位臨命終時不随者唯戒及施不放逸今世後世為伴侶と云文をそつねにはとなへけるちゝたる春の日は四方」(3才)

のこすゑをなかくてもねにかへるためしをかなしみまんゝたる秋の夜は窓うつ雨になみたをそへて袖をうるほしいよゝ生死のやみはなれかたき事をそなけきけるしつかに事の心を思にうけかたき人身を得たる事はうき木のたとへなきにあらす哉あひかたき御法にあへる事曇花もにほひを恥へししかれともうけさるよりもむなしくあはさるよりもかひなし其ゆへ」(3ウ)

は富る人はまほろしのさかへにほたされて後の世をしらすまつしき人は夢のうちを心をやしなはんとて又苦しみのたねをきさず餓鬼餓鬼のうれへにあはずともよろつ不定なる事をなけき紅

蓮のこほりにひえされとも猶かさねん事をいとす心のいはけなき事を思にたとひ天帝尺の果果をうけたりと云共欲心のみなもときはめかたし転輪王の果をえすと云とも希望のつくる事」(4才)

あるへからすあるはあるにつけて猶そへん事をいとなみなきはなきにつけてはしめてえむ事をはけむ昨日は今日のためうつり今日は明日のためにつねたゝこのいとなみにほたされて去年もくれことしもたけぬ又昨日もすきて今日もかたふく廿五年のつきぬる事猶し昨日の夢のことしいまより後三十四のつきん事も又まほろしににたるへしよはひ百廿年にみつる」(4ウ)

ものもをはる時には猶命をおしむかの深禅定の億千歳の切利勝妙のならひなきたのしみもいかてかきはむる心あるへきしつかに是を思ひみよいにしへ若かりし人たれかなからへてさかんなるみとりにかきしまゆすみもひたひの浪にあらはれぬむかしのめりしものたれか久しくたのしめる玉をみかきし楼閣もむくらの露そ門にをく生る

改めた。

- ・見せ消ちは、右傍に「三」と示した。
- ・見せ消ちの右傍に補訂された文字は、「三」の下に小字で示した。
- ・朱筆の補入の小書き文字は、原本の体裁にしたがって右傍に小字で示し、「朱」と注記した。
- ・異本注記、右傍に訂正・補入された小書き文字は、原本の体裁にしたがって右傍に小字で示した。
- ・和歌は、改行二字下げに書き始め、原本どおりの体裁とした。

西行発心物語上

鳥羽院御時北面に召つかはるゝ人侍りき

左兵衛尉藤原憲清とそ申ける天児

屋根尊よりは三十七代の苗裔大織冠よ

りは十六代の後胤鎮守府將軍秀郷に

は九代の末孫左衛門の太夫秀清には

孫康清には一男也弓箭家につた

へ武芸ほまれをほとこし養由か百矢

のいさみをあさけり張良か三略のはかり

ことをもゆるくしき和歌の道は六義のイそこを極め」(1オ)

管絃のきよく人にはちす簫マ更か鳳曲の人

を高樓にあつめしをも物のかすとせさり

き伯雅の霜雲を炎天に下せしにも

をとらす昔素蓋マ鳥尊の三十一文字のや

まことはをつたへ百斎マの味摩マ一百廿の

鳳曲マを柳井マの里にひろめしよりこ

のかたかれたるこすゑに花さく事にて

なさけなき山神たもとをうるほす事

にてそありける中にも此人の事は

いにしへにもくつかへすにはにたれとも」(1ウ)

後のよにもありかたく時にあたりても

ならふたくひなかりき春ははなのもとに

て日をくらし秋は月のまへにて夜を

あかすほうけつの庭に侍りて叡慮のお

もむきをたかへすこすゑの風にな

ひき魚の水にしたかふにことならず身

のほとにとりては世のたからにともし

き事なくて倚頓かふるきあとをうつ

し黄尋か飛銭のとみをまなへりき

其芸ほと／＼世にこえて邵説マか一えた」(2オ)

のたからにもすくれ子建か八斗の能にも

こえたりき天下ゑんはいとしてよろつ

にかけたる事なかりければ花のはるも

みちの秋のあそひにめされぬ事もなか

りければ是にほまれをほとこしかしこ

には名をとめて出しかは君もえいかん

しきりに心よくいそぎ検非違使にな

し給へき御気色にてありしかと

柳下かちよく道のゆへにやめられしも

さためてさこそあらんすらんとおもふ」(2ウ)

処に庄周か犠性マのためしをひき外に

付す。

・印記 上下二冊とも巻末に「尚舎源忠房（墨）」および「文庫（朱）」の蔵書印あり。

・本文 半葉十行書き、十八字程度書写しているが、漢字の多い行については十四字の場合もある。和歌は一首二字下げ、二行書きに書写している。奥書がなく、下冊は、巻末に和歌の散らし書きを以て締めくくっている。

本文は漢字平仮名交じり書きである。文中にイ本注記、見せ消ち、水や胡粉による訂正、重ね書きが見られるが、全で一筆で書写されていると考えられる。また朱による補筆二箇所があるが、同筆だと思われる。

また、片仮名表記の助詞「二」、漢字「并」を小書きとする箇所と、経典の巻数を割注のように書写している箇所がある。

・書写年次 書写年代は不明であるが、旧蔵者であった松平忠房の歿年元禄十三年までには完成されていると考えられる。

【注】

- (1) これまで多くの先行研究による分類がなされてきたが、本稿では、山口真琴氏が統合した名称を用いた（山口真琴「享受と再編―西行物語の伝流と形成―」『佛敎文学』第一四号、一九九〇年三月）。
- (2) 蔡佩青「松平文庫本『西行発心物語』における漢籍故事の受容」第四回西行学会大会発表資料、二〇一二年九月。
- (3) 学習院大学日本語日本文学研究室蔵（九一三・六一―五〇〇八）。写本。内題はなく、外題の文字が剥落し、帙題簽に「異本西行記 元禄頃写」とある。
- (4) 天理大学付属天理図書館蔵（九一・一・三三―一七五）。写本。外題は表紙中央の貼題簽で「七家和歌集」とある。七家とは「忠岑、友則、遍昭、公忠、清正、兼輔、西行」のことで、西行の歌集の冒頭には「山家集」と記され

ている。

(5) 坂口博規「諸山縁起」書承の一資料をめぐって―松平文庫本『西行発心物語』の西行大峰修行談―『岩見沢駒澤短期大学論集』第二号、一九八九年二月。山口真琴「西行物語の構造的再編と時衆」『高知大國文』二三、一九九二年十二月。

(6) 蔡佩青「松平本系『西行物語』の成立について」『古代文学研究第二次』第二号、二〇一二年一〇月。

【付記】本書の閲覧および翻刻の許可を賜りました、肥前島原松平文庫に深く感謝申し上げます。なお、本稿は、静岡英和学院大学及び静岡英和学院大学短期大学部（二〇一三年度）共同研究費による研究成果の一部である。

二、翻刻

【凡例】

- ・本稿は、肥前島原松平文庫所蔵『西行発心物語』全二冊のうちの上冊を、原本に拠ってできるかぎり忠実に翻刻したものである。
 - ・原本の一行をそのまま一行とし、丁数をその丁の最後の行末に「（一〇）」のように示した。
 - ・漢字・仮名の区別をはじめ、仮名遣い、振り仮名、当て字などは、すべて原本どおりとした。
 - ・平仮名・片仮名は、現行の字体に改めた。
 - ・漢字の字体は、異体字・略体字ともに通行の字体に改めたほか、次の漢字は同義とされる通行の漢字に改めた。
- 菴↓庵 姪↓淫 恹↓希 无↓無 鶯↓燕
- ・「見」「身」「地」「為」など平仮名としても用いられているが、意味のうえから漢字として通じるものは、漢字とした。
 - ・意味上、誤字・脱字などとみられるものは、そのまま翻刻し、右傍に「(ママ)」と注記した。
 - ・字形が不整であるなどして判読の難しい文字は、試みに翻刻し、「(カ)」と注記した。
 - ・踊り字（繰り返し符号）は、「ヽ」「ヾ」「ゝ」「く」は区別して、「ゝ」は「々」に

松平文庫本『西行発心物語』の解題と翻刻（上）

蔡 佩青・今井 亨

一、解題

肥前島原松平文庫所蔵の『西行発心物語』は、膨大な「西行物語」テクスト群の一本であるが、従来の「広本系」、「略本系」、「采女本系」、「中間本系（永正本・寛永本系）」の四系統分類のいずれにも属さず、他伝本に収録されていない西行歌や、『宝物集』など先行作品に見られる仏教説話、作中人物や場所をめぐる詳細な記述、『蒙求和歌』を典拠とする漢籍故事の引用など、多くの加筆がなされている異本である。

『西行発心物語』と同系統の伝本で現在確認されているものは、学習院大学日本語日本文学研究室所蔵の『異本西行記』^③と天理大学付属図書館所蔵の『七家和歌集』所収「西行 山家集」^④があるが、『異本西行記』は本文の抜け落ちが多く、「西行 山家集」は物語から和歌を抄出し、地の文を簡略化して詞書にした物語和歌集である。それに對して、『西行発心物語』は、西行が東国から帰京する途中の美濃国までで物語が閉じられる未完本ではあるが、記述が比較的整っており保存状態が良好で、現在のところ、内容構成や本文の性格を検討するに当たっての善本といえるものである。

『西行発心物語』に関する研究は少なく、その殆んどは、該本を広本系に属するとし、内容については、他伝本にない挿話や仏伝、漢籍

故事の引用など叙述上の特徴を言及するにとどまっている^⑤。ところが、『西行発心物語』はほぼ全系統伝本の本文特徴を持っており、その成立は、最も古態を示す広本系に遡ることできないが、その次に成立したと思われる略本系とは密接な書承関係を持ち、略本系と共通した祖本より展開したものではないかと推測される^⑥。そうだとすれば、『西行発心物語』は決して単なる長大化した「西行物語」の一伝本というわけではなく、その諸本分類上の位置づけと本文解読は、今後の「西行物語」の作品研究においても、文献学的研究においても、大きな意味を持つと考えられる。そこでまず、全文を翻刻して紹介することによって、『西行発心物語』の研究の第一歩としたい。

書誌については、以下のとおりである。

・函架番号 一一五―八

・外題 表紙左肩に題簽で「西行發心物語上」「西行發心物語下」とある。

・内題 各冊のはじめに一行をとって「西行發心物語上」「西行發心物語下」と書く。

・形態 写本。上下二冊。袋綴じ。

・寸法 縦二七・五糎。横二〇・三糎。

・丁数 上冊墨付六十一丁。下冊墨付五十丁。各冊前後に遊紙各一丁